

寄稿

技術士包装物流会創立50周年にむけて

—回顧と展望—



牧野 輝男

技術士包装物流会の創立50周年を心からお祝い申し上げます。

私の包装人生の中で、技術士包装物流会との関わり合いと、今後の抱負について感想を述べさせていただきます。

昭和32年(1957)乳業会社に入り、研究所で37年間、主として食品包装の開発・研究を行ってきました。当初、研究所では粉体食品の防湿包装を担当し、包装材料とともに、粉体の吸湿特性の把握など、包装における基礎研究の重要性を肌で感じてきました。また、包装材料も、多くの高分子材料が芽生えた時代でもあり、その選択には多くの時間を費やしてきました。

技術士合格は昭和46年(1971)で、面接官は日常業務で面識のあった先生方であり、平常心で面接を受けたことが思い出されます。企業内技術士としては、所詮、その活動には制約があり、主として、読書会では、包装先進国である欧米の洋書を通して、未来の包装に夢を託した時代でもあった。定年前の2年間(平成4～5年)会長を務めさせていただいた。平成4年は日本包装学会発足の年でもあり、その運営に同士と共に協力しました。

会長時代、JPIの依頼により先輩の中山先生とブルネイ国に食品包装の技術指導を行い、技術士の活動として一定の成果を得たことが思い出されました。定年後、8年間、北海道の酪農学園大学で、わが国で初の食品流通学科(包装学研究室)を立ち上げ、包装人材の育成を図ってきました。東京に戻ってからは、親の介護に明け暮れし、現実の問題として高齢化社会の包装問題に関心を持ってきました。しかし、気が付けば卒寿を超え現在に至っています。

さて、包装の50年の進化は未来を予測します。包装における基礎研究の重要性は先にも述べましたが、わが国においてもGDP600兆円に向けた成長戦略が打ち出されました。JPI主催の新年合同祝賀会では、技術士包装物流会、日本包装学会等が一同に会い、有機的な活動がなされています。特に、包装技術と基礎研究の接点があって未来志向の包装が生み出されないだろうか。さらに今後の活動に期待します。